HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「自己をふりかえる」ための異文化間教育の実践報告 : 教職希望学生の「気づき」の考察
Author(s)	齋藤, 眞宏
Citation	異文化間教育学会第32回大会. 平成23年6月11日（土）-12日（日）. お茶の水大学. 東京都.
Issue Date	2011-06-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46201
Type	conference presentation
File Information	saito_intercultural.pdf

Instructions for use

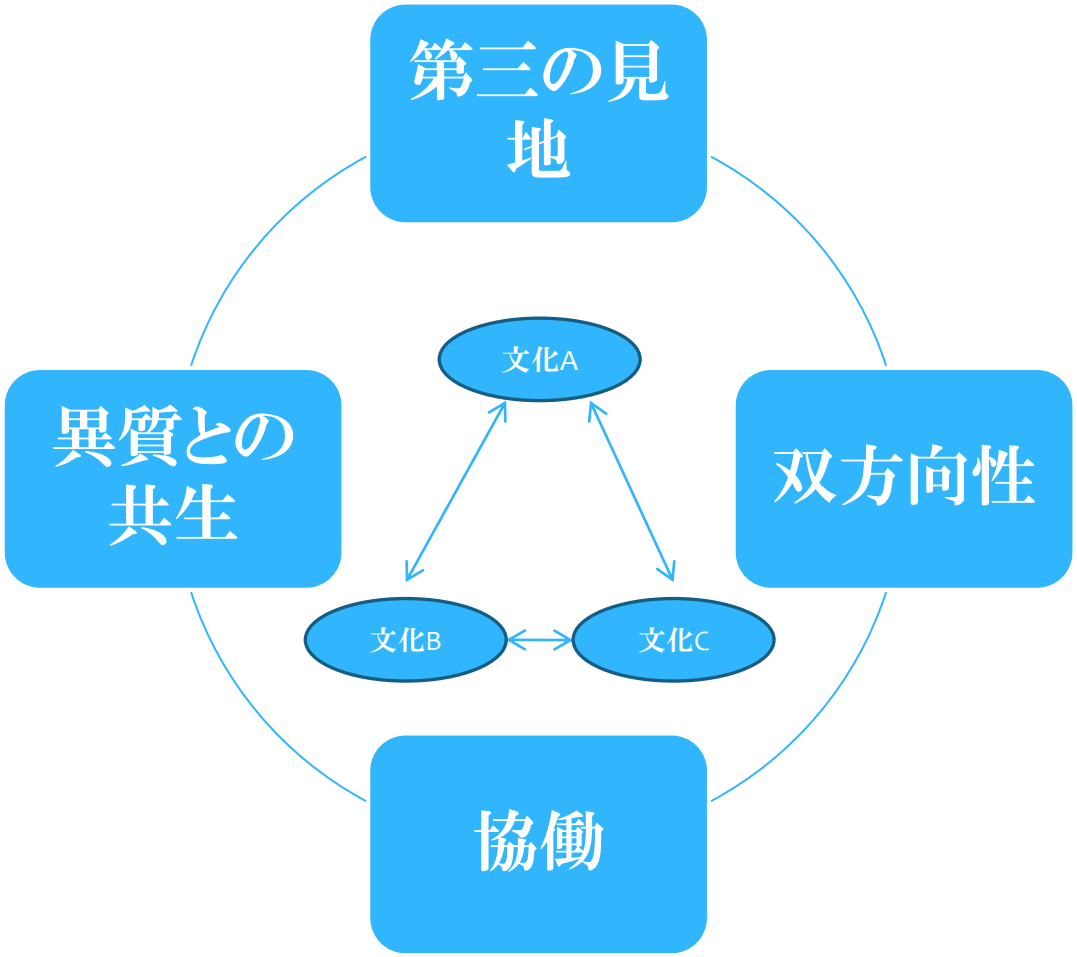
Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「自己をふりかえる」ための異文化間教育の実践報告
―教職希望学生の「気づき」の考察－

第32回異文化間教育学会
（於　お茶の水女子大学）

齋藤　真宏（旭川大学経済学部）
E-mail: saitoum@live.asahikawa-u.ac.jp

1. 異文化間教育の見取図



異文化間教育のエートス（小島、pp.9-14）

1. 二（多）元性・異質の共生
2. （異文化）間性・双方向性・相互性
3. 相対性・第3の見地・普遍性
4. 関係性・対等性・権力性
5. 相互変容性・構築性・創造性

2. 教育実践者としての問題意識

表面的なものにとどまる「異文化理解主義」「ナイーブな文化相対主義」（馬渕、2008）

1. 予定調和的学習態度
2. 単純な二項対立
3. コンフリクト・フリー
4. 「異」のカテゴリーを無批判に受け入れる。
5. 社会の不平等や不公正に無関心

3. 教育機会の平等を保障するために

1. 形式論的解釈（入口や教育内容の平等）
2. 補償論的解釈（ESL、ヘッド・スタート等）
3. 参加論的解釈

（Howe, 2004）

4-1. 教師教育と異文化間教育

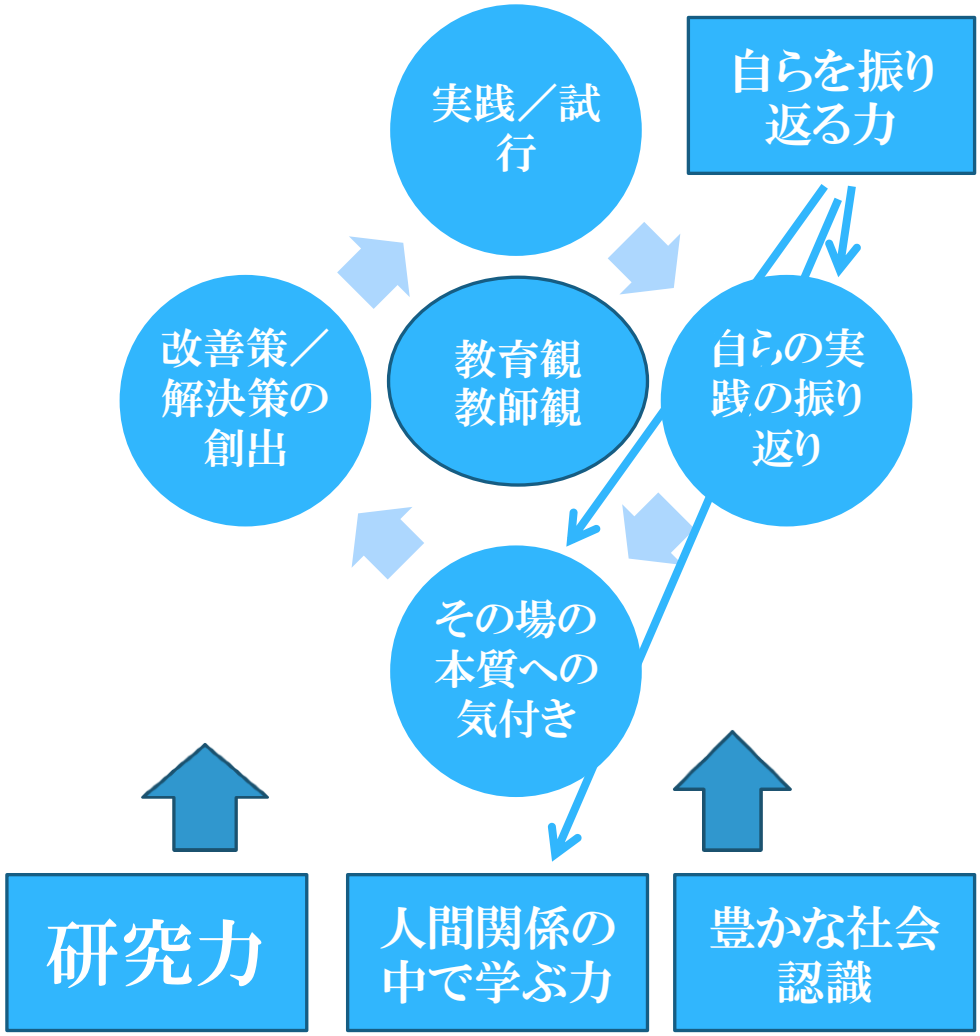
1. 「我々（We）」と「彼ら（They）」と安易に峻別する二項対立的な思考を改め、どのように「お互い（Both）」の課題として考えることができるか
2. 自分達の所属する社会、学校、教師集団、生活指導や授業の方法など、自明視している価値観、制度、構成員などの背後にある「隠れたカリキュラム」をどう自覚するか

（田渕、p.48）

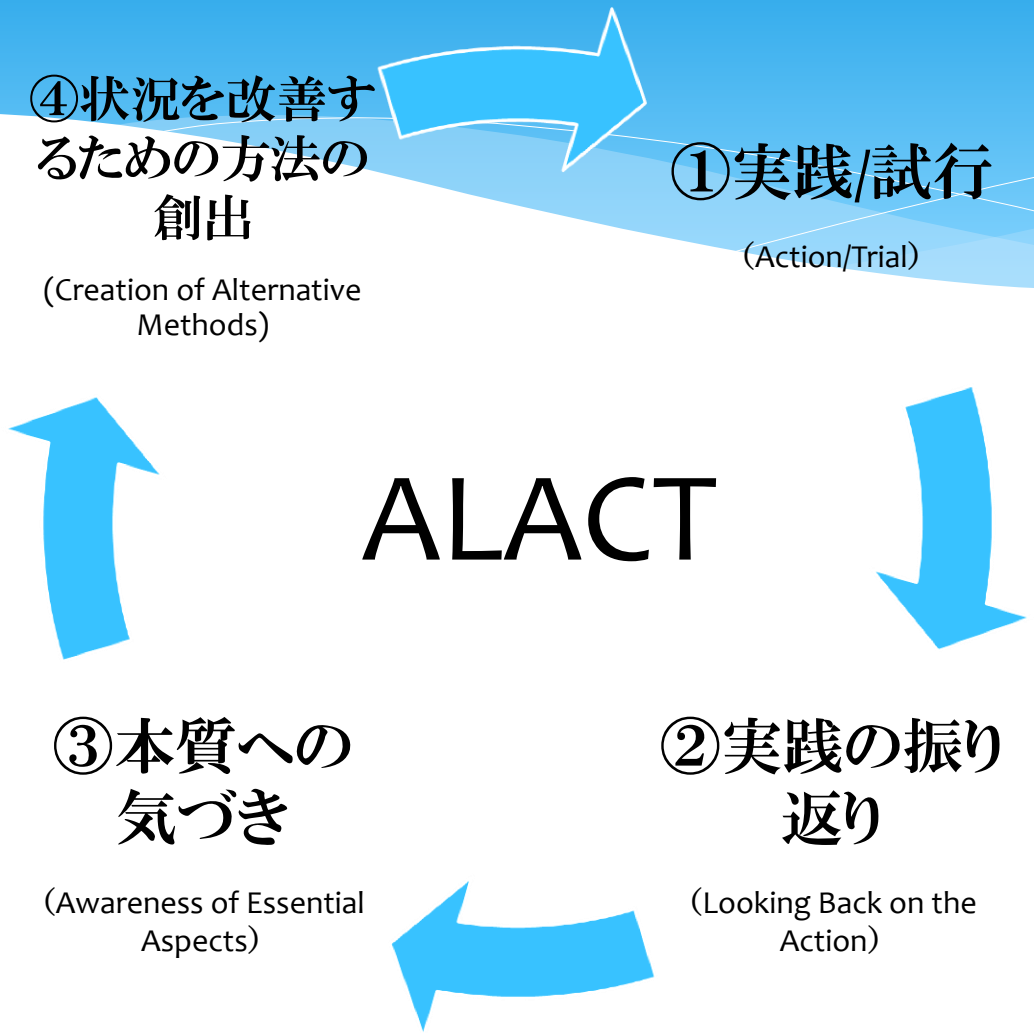
省察的実践力

4-2. 私の「実践的指導力」観

1. 多様な子ども達の可能性を引き出すためには省察的実践力を最重要視
2. 省察的実践の中心は教師としての「信念」（教育観／教師観）
3. 省察的実践を支える力として研究力、人間関係の中でブレーク・スルーする力、豊かな社会認識



参考　Korthagen（1985）の総合的循環型省察的実践



4-3. 自らを振り返る力の重要性

* 省察的実践では「自らの実践を振り返る」ことが求められる。
* 省察的実践力を獲得するうえで、人間関係の中で学び、ブレーク・スルーする力は他者との共生を必要とする→他者理解のためには自らをふりかえり、自らの発展の過程を社会・文化的背景も含めて理解する力が必要である。

自らを振り返る力を養成する場としての異文化間教育

5-1.　教職課程「異文化間教育」①

開講時期及び履修者数

2009年度

　夏期集中講義（8月21日～28日）

　履修者　9名（うち社会人学生6名）

2010年度

　通常講義（前期15コマ）

　履修者11名

　（うち社会人学生2名　※中学校教諭および専門学校教諭）

5-2. 教職課程「異文化間教育」②

<u>コース目標</u>

自らを見つめるとともに多様な視点を獲得し、その結果としての学生たちがそれぞれの変容を遂げることできる。（2009年度）

自己と他者をまなざすとともに多様な視点を獲得し、共生についてのそれぞれの意見を発展させ、その結果として学生たちがそれぞれの変容を遂げることができる。（2010年度）

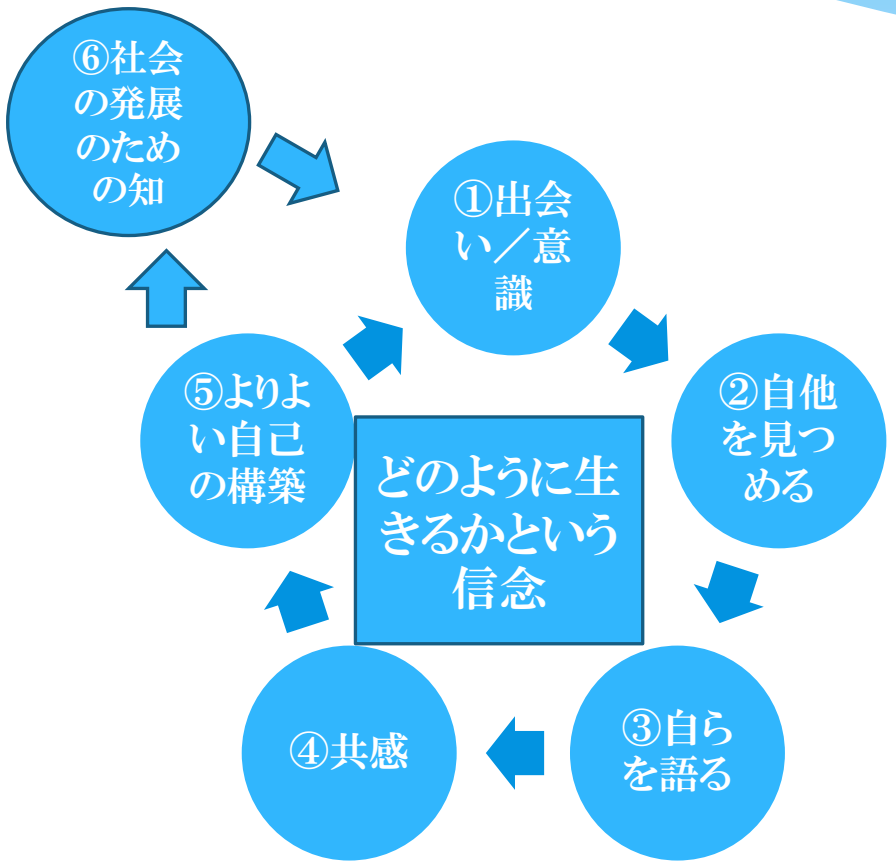
5-2. 教職課程「異文化間教育」②

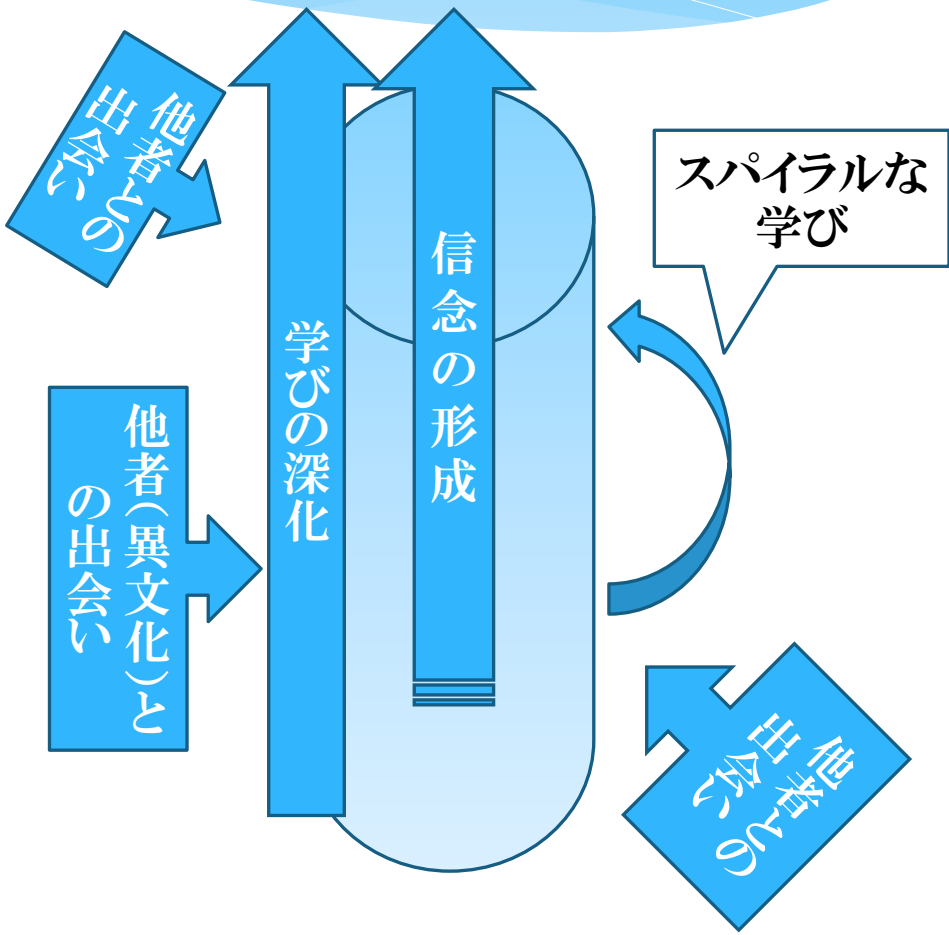
最も重要視した学び

学びの5段階

① 異文化に出会い、その存在を意識する
② 自己をふりかえる
③ 自らを「語り」他者に共感して、関係性を構築する大切さに気付く
④ よりよい自己の構築につなげる
⑤ 異文化間教育の学習を通じた、教育観および教師観の発展

5-3. 教職課程「異文化間教育」③





6-1. 異文化間教育指導計画

大まかな講義の流れ

異文化を見つめ、共感的理解に努める

自らを（社会・文化的背景を含めて）見つめる

異文化間教育について考察し、パラフレーズする

6-2.「異文化間教育」指導計画

講（全15講）	学習内容
第1講	オリエンテーション 「パワーシャッフル」「部屋の四隅」
第2講	「世界がもし100人の村だったら？」
第3講	「地球の仲間たちフォトランゲージ」
第4講	「レヌカの学び」
第5講	「雪渡り」から学ぶ他者理解
第6講	アイヌ民族と国民国家日本
第7講	「イオマンテ」とアイヌ民族と日本人

6-3.「異文化間教育」指導計画

講（全15講）	学習内容
第8講（2009）	「自文化」「異文化」と異文化間理解／自己をみつめるアクティビティー”Individual Microcultures”[Watson, S.W. & Linda, J. (2006)]
第8講（2010）	自らを「まなざす」／自己をみつめるアクティビティー”Individual Microcultures”[Watson, S.W. & Linda, J. (2006)]
第9講（2009）	「共生」について
第9講（2010）	「自文化」と「異文化」と「共生」
第10講 第11講（2009）	臨時講義　講師トンコリ（アイヌ伝統楽器）奏者　加納沖氏
第10講 第11講（2010）	社会的「非寛容」の構造／人間の動的理解

6-4.「異文化間教育」指導計画

第12講 第13講（2009&2010）	人間解放のための教育：多文化共生教育
第14講 第15講(2009)	多文化共生教育の実践：その歴史と現在
第14講 第15講（2010）	イオマンテとアイヌ（臨時講義　太田満氏）
最終レポート（2009）	「すべての教育は異文化間教育である」（倉地、p. ii ）という視点について論ぜよ。
最終レポート（2010）	イオマンテの継続（仔熊の命を奪う行為も含む）について論じよ。 「すべての教育は異文化間教育である」（倉地、p. ii ）という視点について論ぜよ。 異文化間理解の学習を企画せよ。

6-4. 「異文化間教育」指導計画

講義における「仕掛け」

* 意見カード（2009：7本、2010：9本）を記入
* 各意見カードに記載された意見は各学生の許可を得たうえで、次の講義時の冒頭でコピーして配布した。
* 10分から15分のディスカッションを行ってクラス全体で各学生の意見や価値判断を共有した。
* 全15講における学習のまとめとして最終レポート。

7-1. 研究手法

意見カード、最終レポートの記述は、学生達が比較的に自発性を持って書いた「生」のデータであり、それらに基づいて学生たちの学びを評価する。

「市民的資質の評価は、価値判断の根拠とその組み立ての論理の分析を通してできる」（岩田、p.33）

7-2. 研究手法

意見カード・最終レポートを重視する理由：学生たちの内面の表現を支援し、それを相互の学びにつなげるため

* 経験や体験からの学びの促進
* 多様な視点と疑問を持つ態度の発展
* メタ認知の促進
* 自主的な学習態度の獲得
* クラス内における省察的で創造的な対話を生む
* 自己肯定感の涵養
* 学生たちの考察過程を記録できる
* 学生たちの理解とその表現の支援

8-1.　学生達の学び

① 異文化に出会い、その存在を意識する（3名）

* （第7講で「イオマンテ」のVTRを視て）我々アイヌ系ではない日本人としては異文化と感じる（学生A）
* （イオマンテの継続に対して）アイヌ以外の人たちがこの行為の継続についてどうこう言う必要はない。（略）今現在禁止されているわけではないのでイオマンテをすることはできるので、行わなければいけないと思う人のみが行えばよい（学生B）
* （イオマンテは）いくら伝統とはいえ、残酷で野蛮な儀式（学生C）

8-2-1.　学生達の学び

② 自己をふりかえる（13名）

<u>イオマンテに関する学習から</u>

* （イオマンテは残酷に見えるかもしれないが）私たちは自ら殺していないが、誰かが殺したのを食べている（学生D）
* （イオマンテは）普通に生活して普通に食事をするのが当たり前という考え方を改めて考えさせられるとても良い伝統なのではないかと思いました（学生E）
* （何のためにイオマンテをするのか良くわからずに）「共感できなかった」からイオマンテに反対（学生F）

8-2-2. 学生たちの学び

* 自分が誰なのか、どこの人なのかわからないままほかの文化に対してどうこう言えることではない。・・・異文化という授業を受け、はじめて自分は、いずれ自分の考えや文化すらわからなくなる気がしてきた。最後に今の世界を生きる自分を見ると、この儀式（イオマンテ）には反対なのかな。でも反対しているのに普段の生活で動物の肉を食べている矛盾が出てくる（学生G）
* （イオマンテに対して）残虐だとは思うが、狩りのために神聖なものとしてとらえているので、儀式として継続していくことに賛成。・・・生きていくには、動物を殺し、肉として食べていかなければならないので、その動物たちに監視する気持ちを込めて儀式をするのはいいと思う。でも、もし、私がアイヌ人で“イオマンテを行う”と言われたら「儀式だから参加する」とは思わないと思う。やっぱり、かわいそうだという思いが先に来てしまうから。でも地域行事のようなものでしたがってしまうのだろうか。（学生H）

8-2-3. 学生たちの学び

<u>イオマンテ以外の学習から</u>

* （「世界がもし100人の村だったら」を通して）私にとっては大学にいけることもコンピューターがあることも当たり前になっていたけど、そうでないのだと改めて実感した。（学生I）
* （「フォトランゲージ」を通して）日本に住んでいる自分はほかの国をバカにし過ぎだと思った。アメリカやヨーロッパ以外の国なんてだいたいが勉強をまともにすることができないし、生活だけでいっぱいいっぱいなのかと思っていた自分がいた。（学生J）

8-2-4. 学生たちの学び

* （「レヌカの学び」を通して）何度も「レヌカさんの気持ち」になって考えようとするのだが、どうしても自分の主観が邪魔をしてなかなかレヌカさんの気持ちにまでたどり着けないという思いをした。よく簡単に「相手の気持ちになって考える」ということを言うしいわれるが、もしじっくりと本気になって相手の気持ちを考えようとした時、実際はどれだけ相手側のことを理解してあげられているのか、自分自身の体験からその理解度は低いだろうと感じた。（学生K）

8-2-4. 学生たちの学び

* （「雪渡り」を通して）異文化間教育の最終地点（ゴール）は何なのでしょうか？偏見・差別が文化の地域があるとしたら、その文化を肯定することが異文化間理解になるのか？否定したら異文化間理解をしていないことになるのか？多様な文化を理解することが異文化間教育だと思っていましたが、単純にそうとは言えないのかなと思いました。私の中の疑問は深まるばかりです。（学生L）

8-3-1.　学生たちの学び

③　自らを「語り」他者に共感して、関係性を構築する大切さに気付く（3名）

* 偏見を持ってはいけないというのは無意味である。なぜならば偏見を持たない人間など存在しないから。偏見をお互いに持っていると認めて、そこからお互いを理解することを始めるしかない。（学生M）
* 上の文化も下の文化もなく、お互いに違う知識や違う価値観を出し合い、認め合い、初めて出会うものを自分の価値観の範囲で理解すること（が異文化間理解）（学生N）

8-3-2. 学生たちの学び

* 私の生き方として、自分自身も「偏見」を持ち、変だと感じる部分については忌み嫌うことが多々ありました。ですが、それはどうしてそうなるのかと自分なりに考えてみたときに、一番に来るのは「知らない」という理由ではないかと思います。・・・誰かに理解してもらえないときは絶対にあると思います。そんなときは嘆き苦しむのではなく、「相手を知ること」「自分を知ってもらうこと」で異文化間理解の開拓に努めていきたいと思います。（学生O）

8-4. 学生の学び

④ よりよい自己の構築につなげる（1名）

自分への気づき

（自分を見つめるアクティビティでは）自分のことを書けば書くほど、自分が少数の部類になっていくことを感じ、「マイノリティ」になることを避けたかっただけなのだと自分の感情に気づいた。「マイノリティ」になることを避けたいと思ったのは、「マイノリティ」に対して負の印象をもっているからである。・・・自分が他者から見れば少数派の「異文化」であると自覚した時、いつでも弱い立場になると実感した。自文化、異文化の違いは固定されたものではなく、自分の立場によって変わる。

学び

異文化を自覚しながら、他者とコミュニケーションをとらなければ社会の中で生きて行くのは難しい。・・・異文化間理解は人と人のコミュニケーションから始まり、「人」を理解していくことであり、その人の生きてきた背景を含めた現在を理解し合うことである。（学生P）

8-5-1. 学生たちの学び

⑤教育観、教師観の発展（5名）

学生F

* 教師自身も自己洞察を行い、自己認識をしていかなくてはいけない。（教師観）
* 教師も生徒も異文化であり、自己理解と他者理解を通し、関係を構築していかなくてはならない。私はこのような人とのつながりや関係を子どもと教職員で実践していくことが異文化間教育の第一歩なのではないかと考える。（異文化間教育観）
* 私は子どもたちがより豊かに自由で多様な視点から物事を考え、個性を発揮することができる教育環境を与えることで、生きる力を身につけていってもらいたい（教育観）

8-5-2. 学生たちの学び

学生H

私は教員としてクラス内のいじめの有無に注意を払っている。・・・いじめを受けないようにするにはみなと合わせ、みなと同じ服装や行動をしていなければならないということがいえる。こう考えると人間は、1人ひとり本来それぞれ異なる環境で育ってくる以上、1人ひとり異なる個性を持つことが当然であるにも関わらず、異なっていること違っていることがあたかも悪いことであり、人間関係の摩擦のもとになっている・・・それぞれの違いを認め合いそれを尊重しつつ、新しい人間関係が育成されなければならない。（教育観）

8-5-3. 学生たちの学び

学生K

目の前の現実ばかりを追うのではなく、視野をいろいろなところに広げて多角的に、そして相手の心や気持ちを理解できる柔軟な考える力を持った生徒を、教師になることがあったら育てていきたい。（教師観）

学生O

教育は常に同じ人間と相対しているわけではない。また、同じ人間だとしても成長し、変容を遂げていくものである。つまり1人一人の文化に沿った教え方が必要となる。そして教師は、子どもの立場に立ち、内面に寄り添って求めるものを一緒に求める重要な他者として存在しなければならない。（教師観）

9. 結論

1. 20名のうち17名の学生は「自らをふりかえる」記述が認められた。特に「異文化」であるイオマンテの提示が効果的であった。
2. 「自らをふりかえる」記述も「自分たちも命を頂いている」という内容から、「自分がよくわからなくなった」「異文化間教育の目的は何か」というものまで多岐にわたる。
3. 異文化間教育の学習を通じて、教育観、教師観の発展につながったと想定できる学生は5名であった。

10. 学生たちの「気づき」からの考察

1. 学生たちにとって「異文化」であるイオマンテに対する葛藤
2. 二項対立的思考（例 「アイヌ民族」vs.「私たち」）
3. 「自らをふりかえる」作業はしているが、自らが育った社会・文化的背景に対する考察がほとんど見受けられない。言及している学生であっても、具体性に欠けている。

例）（イオマンテに対して否定的になってしまうのは）私たちが命や動物愛護の道徳的な教育と、殺す・死などを否定する情緒的な教育をされてきたからである（学生M）

4. 異文化間理解に対する考え方の深化：異文化間理解は「するべきもの／必要なもの」→理解できない異文化の存在への気づき

参考文献リスト

* ハウ、K.（Howe, K.）大桃敏行、中村雅子、後藤武俊（訳）(2004).『教育の平等と正義』（*Social Justice, Democracy, and Schooling.*）東信堂.
* 小島　勝. (2008).「異文化間教育学の研究主題と研究の観点」小島勝（編）『異文化間教育学の研究』. ナカニシヤ出版.
* Korthagen, F.A.D.(1985). Reflective teaching and pre-service teacher education in the Netherlands. *Journal of Teacher Education, 36(5)* , 11-15.
* 馬渕仁. (2008).「多文化・異文化リテラシーにおける『文化のとらえ方』」. 小島勝 (編),『異文化間教育学の研究』. ナカニシヤ出版.
* 田渕五十生. (2007).「日本の教師教育と異文化間教育」.『異文化間教育』, pp.47-57.
* Watson, S.W. & Linda, J. (2006). Tolerance in Teacher Education: Restructuring the Curriculum in a Diverse but Segregated University Classroom. *Multicultural Education, 13(3), pp.14-17*